

西園寺文庫蔵『新院御会部類集』について

中島 結香

はじめに

立命館大学図書館には西園寺文庫があり、およそ七千冊の貴重書が所蔵されている。稿者は、二〇一五年度開講授業「専門演習Ⅰ(DA)」[専門演習Ⅱ(DA)]において、西園寺文庫を調査する機会があった。西園寺公望や西園寺家に関して調べ、西園寺文庫の貴重書を閲覧する過程で、近世前期の当主、西園寺実輔とその蔵書に興味を抱いた。

本論文では、西園寺文庫所蔵で、西園寺実輔の蔵書と思われる『新院御会部類集』(SB911.157/T37)について考察する。

第一節 西園寺文庫の沿革と西園寺公望

西園寺文庫については、立命館創始百二十年(学園創立九十周年)記念として作成された『立命館大学図書館蔵西園寺文庫目

録』(立命館大学図書館編集・発行 一九九〇年)に詳しい。以下、同書などを参考に、西園寺文庫の沿革と西園寺公望の経歴を論述する。

西園寺公望は、明治二年(一八六九)に、京都御所内の邸に家塾「立命館」を開設するが、間もなくして太政官の命により閉鎖させられる。その後、明治三十三年(一九〇〇)に、中川小十郎が家塾「立命館」の精神を引き継ぎ「私立京都法政学校」を創立する。明治三十八年(一九〇五)、中川小十郎は、西園寺公望から許諾を得て、「立命館」の名称を継承する。

西園寺公望は自身が開設した家塾「立命館」の精神を受け継いだ「立命館大学」に関心と期待を寄せていたため、大学に蔵書を寄贈している。寄贈は三度に及ぶ。最初の寄贈は、大正十四年(一九二五)、英・仏書百八十冊である。ついで、昭和六年(一九三二)に和漢書三百冊、昭和十五年(一九四〇)に和漢書六千六百七十一冊である。立命館大学では、これらを保存活用するため、昭和十三年(一九三八)、西園寺文庫を創設した。

西園寺文庫の資料には、清華家である西園寺家伝来の古籍や、近代の政治家西園寺公望関連の伝記資料などが含まれ、学術的価値が高い。これらの西園寺公望から贈られた資料に、大学が収集した図書・資料を加え、現在およそ七千冊が保管される。『立命館大学図書館蔵西園寺文庫目録』収録点数は、凡例によると、漢籍四百十三点、和書二千八百八十四点、洋書百七十四点、逐次刊行物三十九点、諸資料百六十一點、学宝類三百七十七点である。

西園寺公望（一八四九—一九四〇）は、旧堂上公家で清華家の徳大寺公純（一八二一—一八八三）の二男として京都に生まれる。同じく清華家の西園寺師季（一八二六—一八五一）の養子となる。

維新時には山陰道鎮撫総督や三等陸軍将・新潟府知事などを歴任し、明治三年（一八七〇）より、フランスへ留学した。明治十三年（一八八〇）に帰朝後は、参事院議官補・同議官となり、明治十七年（一八八四）七月の華族令公布に際して侯爵を授けられる。その後は、オーストリア・ハンガリー駐劄特命全権公使やドイツ駐劄特命全権公使・賞勲局総裁・貴族院副議長・枢密顧問官などの諸官を歴任し、明治二十七年（一八八四）十月には、第二伊藤博文内閣で文部大臣・外務大臣、明治三十一年（一八九八）一月には、第三次伊藤内閣で文部大臣、明治三十三年（一九〇〇）十月には枢密院議長となり、明治三十六年（一九〇三）七月に伊藤のあとをうけて立憲政友会総裁に就任し、明治三十九年（一九〇六）一月から明治四十一年（一九〇八）七月まで、また

明治四十四年（一九一〇）八月から大正元年（一九一二）十二月の間、二度内閣総理大臣をつとめた。以後、元老に列し、大正八年（一九一九）一月からは、パリ講和会議全権委員の首席となった。

西園寺公望は、聡明で、広い国際的視野を持った穏健な自由主義者であり、和漢洋の学問や詩文にも造詣が深く、多趣味で洗練された文化人であった。また、いわゆる貴族的気質に富み、過度に物事に熱中することに乏しく、権力・富・名誉などにも恬淡たる性格で、その点、政治家としては気力・意欲に欠ける嫌があったと言われている。昭和十五年（一九三〇）十一月二十四日、静岡県の別邸坐漁荘（現在の静岡県静岡市清水区興津清見寺町）で死去。享年、九十二歳。同年十二月五日、東京日比谷公園において、国葬が行われた。墓は、東京世田谷の西園寺家墓地にある。

第二節 『新院御会部類集』の書誌と問題点

立命館大学図書館西園寺文庫蔵『新院御会部類集』（SB 911.157637）は、袋綴冊子本一冊。寸法は、縦二八・六糎、横二〇・六糎。表紙は、薄萌葱色無地紙表紙。表紙の左肩に、付書きで、外題「新院御会部類集 自天和二至三」と墨書される。内題は「天和二年九月四日 新院御当座」とある。一面一行書き。墨付丁数六二丁。遊紙は、巻頭に三丁、巻末に二丁。巻頭に、双郭陽刻方形朱印（印文「実輔」）を捺す。

内容は、天和二年（一六八二）九月四日から、翌天和三年（一六八三）十二月十六日までにかけて実施された新院（後西院、一六三七―一六八五）主催の和歌御会（計二十九回）にて詠まれた和歌である。御会は実施された日付の順であり、御会ごとに、題と作者と和歌が示される。原則、兼日は、作者の身分秩序により、当座は題により、配列されている。

『新院御会部類集』には、「実輔」の朱印が捺されている。これは、西園寺実輔（一六六一―一六八五）の蔵書印と思われる。橋本政宣『公家事典』（吉川弘文館 二〇一〇年）によると、西園寺実輔は、関白従一位左大臣鷹司房輔（一六三七―一七〇〇）の二男であり、西園寺公遂（一六六三―一六七八）の後継として、西園寺家に入った。延宝九年（一六八一）八月十一日、権中納言となり、天和二年（一六八二）十一月三十日、前名、兼敦を実輔と改名。天和三年（一六八三）二月十四日、中宮権大夫となる。貞享二年（一六八五）一月五日、二十五歳で死去している。

西園寺実輔の死去には、不可解な話が伝わっている。

四日、(略)

一、又伝聞、元日之夜西園寺大納言乱心、内儀西園寺実晴ノ弟南都〔南都方〕北院遷俗ノ人ノ息也ヲ刺殺、其外追従ノ女房三人手負、自身ハ自害也、しかれとも至今日いまた不死者療治最中云々、奇妙之事也、又一説二自身も即時死去云々、いまた実説不分明、

五日、泉涌参詣、西園寺死去也、後二聞ケハ非乱心、有故之事也云々、
〔堯想法親王日記〕貞享二年正月四日条・同五日条^②

右に掲げた妙法院宮堯想法親王の日記『堯想法親王日記』によると、西園寺実輔は、貞享二年（一六八五）の元日に「乱心」し、室を刺殺し、自身も自害したというが、同四日の時点で「いまた不死」で「療治最中」ともいい、一説には「即時死去」ともいうなど、情報が錯綜しており、「実説不分明」であるという。同五日条には、「死去也」とするが、「非乱心」とされている。

西園寺実輔の死去の時期により、『新院御会部類集』は、近世前期の書写であり、収載和歌御会最終の天和三年（一六八三）十二月十六日以降、貞享二年（一六八五）正月五日までに写されたことが判明する。

第三節 収載和歌御会と出詠者について

『新院御会部類集』には、計二十九回の後西院和歌御会が収載されている。後掲の〔表〕に、二十九回の御会の開催日と御会の種別、出詠者と歌数をまとめた。上段の御会には、収載順に1〜29の通し番号を付した。出詠者名の左は、各御会における歌数であり、「出詠回数」には、各出詠者の合計歌数を記している。〔表〕の空白欄は、出詠していないことを表している。

出詠者は計二十四人である。つぎに、その名前と、天和二年（一六八二）当時の年齢を掲げる。

後西院46／員丸11／近衛基熙35／有栖川宮幸仁26／勸修寺経慶39／鳥丸光雄36／中院通茂52／日野資茂33／平松時量56／今城定淳48／風早実種51／山本実富38／白川雅喬63／裏松意光31／穂波経尚37／田向資冬46／高野保春33／櫛笥隆慶30／今城定経26／日野宣勝30／平松時方32／石井行豊29／飛鳥井雅豊18／桑原長義22

右のほかに、「隆庸」という人物がいる。「表」の15「天和三年閏五月十一日御当座」に、一首出詠している。この人物の経歴は不明である。おそらく櫛笥隆慶の誤りであろうと思われる。

出詠者について述べる。主催者である後西院は、全二十九回に出詠し、計五十四首を残している。後西院と同様、全二十九回に出詠する員丸（員宮、すなわちのちの八条宮尚仁親王、後西院第八皇子）は四十三首である。同じく後西院第二皇子である有栖川宮幸仁親王は、二十八回に出詠し、四十四首である。田中隆裕「後西院の和歌・連歌活動について」（『和歌文学研究』第五三号一九八六年十月）は、後西院の和歌御会が、自身の皇子たちの「和歌教育も兼ねたと思われる」と指摘する。出詠回数の多さは、このことに関係しているのではないだろうか。

興田吉従『諸家家業記』に、当時の「和歌の家」に、上冷泉・飛鳥井・鳥丸・中院・三条西を挙げている。『新院御会部類集』には、この「和歌の家」の飛鳥井雅豊・鳥丸光雄・中院通茂がお

り、中山冷泉家である定淳も在している。

このほか、出詠の多い人物は、近衛基熙が二十五回四十四首、平松時量二十九回四十二首、風早実種二十五回三十六首、高野保春二十六回三十八首、平松時方二十九回四十二首、飛鳥井雅豊二十五回三十一首、桑原長義二十五回三十七首である。このうち、近衛基熙、平松時量、風早実種、高野保春は、後西院主催の連歌御会にも出座しており、後西院歌壇の主要な構成員であるということができる。

後西院は、後水尾院の第八皇子である。寛永十四年（一六三七）年十一月十六日に生まれ、貞享二年（一六八五）年二月二十二日に、四十九歳で崩御した。名は良仁。父後水尾院の弟、高松宮好仁親王の跡を継ぎ、桃園宮・花町宮と称する。その後、第一一代天皇として、明暦二年（一六五六）年から寛文三年（一六六三）年まで十年間在位し、寛文三年に靈元院に譲位した。靈元院への中継ぎの役割を果たした。

前掲田中隆裕論考は、およそ三十二年間の後西院の文芸活動を、和歌と連歌の両御会の活動状況によって、「第一期和歌時代」「第二期連歌時代」「第三期並立時代」の三つに区分した。そのうち、第三期について、次のように論述する。

和歌御会はやや遅れて天和二年九月四日の御当座会を皮切りに十月七日・十一月十七日と興行され、十二月に入ると第

研究』第五三号 一九八六年十月)

一期後半の様な月次御会が再開されている。以降天和三年・同四年即ち後西院崩御の前年の貞享元年十二月十七日まで順調に継続して行き、計四十六回を数える。この間の天和三年四月に靈元天皇と近衛基熙とに古今伝授を授けている。

この期間の主要な連衆をあげたい。第一期から一貫して通茂・保春・時量・実種・隆慶らがいる。

後西院の皇子では、第二皇子幸仁親王、まだ童形で貞享三年に元服する員丸のちの八条宮尚仁親王達がおり、和歌教育も兼ねたと思われる。

廷臣ではまず近衛基熙をあげたい。彼は後水尾院の皇弟信尋の孫で、同院皇女品宮常子内親王を夫人とする後水尾・後西院二代に亘る「寵臣」である。(中略)貞享二年から十年前は延宝三年にあたるが、後西院の和歌御会へは延宝三年から、連歌の方は延宝二年からそれぞれ出座し始め、最後まで後西院サロンの重要な位置を占めていた。

他に、時量の嫡男時方、次男石井行豊、ふたりとも飛鳥井雅章女を母とする。その雅章の四男雅豊もあげうる。同じく歌人の血を引く裏松意光は烏丸光広の嫡男光賢の次男資清の嫡男である。後西院と同日に古今伝授を受けた弘資や亡き父資慶の代わりに各嫡男資茂・光雄が出座している。これら若手の連衆は『資茂卿記』等によると後西院に和歌指導を仰いでいた様である。

(田中隆裕「後西院の和歌・連歌活動について」『和歌文学

『新院御会部類集』収載の和歌御会は、後西院による和歌活動の第三期にあたることがわかる。主要な構成員は、おおむねつぎの三つに分類することができる。

①第一期からの古参：中院通茂・高野保春・平松時量・風早実種・櫛筒隆慶：第一期からの古参

②後西院皇子……………員丸(八条宮尚仁親王)・有栖川宮幸仁親王

③第三期からの新参：近衛基熙・平松時方・石井行豊・飛鳥井雅豊・裏松意光・日野資茂・烏丸光雄

①は、後西院の父後水尾院により選ばれた近習であり、後西院の和歌活動を長らく支えてきた人物たちでもある。これらと和歌を楽しむ一方で、②の皇子および③の若手の後継を育成する目的もあつたことががわられる。

つぎに、『新院御会部類集』収載の和歌御会が、当時の公家社会における和歌活動でどのような位置を占めていたかを確認するため、古相正美「近世御会和歌年表」(『中村学園研究紀要』第二七号 一九九五年三月)により、天和二年(一六八二)から天和三年(一六八三)までに、禁中・洞中などで行われた全一四回の歌会をあげる。『新院御会部類集』収載の和歌御会には、網掛けを施した。

開催年月日	御会名
天和三年九月二七日	新院月次
天和三年九月二七日	新院当座
天和三年九月二九日	禁中御内会
天和三年一〇月九日	禁中当座
天和三年一〇月二二日	禁中当座
天和三年一〇月二七日	禁中当座
天和三年一〇月二七日	新院当座
天和三年一〇月二九日	新院月次
天和三年一〇月二九日	新院当座
天和三年一〇月二四日	中院亭内会
天和三年一〇月二五日	新院月次
天和三年一〇月二五日	新院当座
天和三年一〇月二三日	為綱亭会
天和三年一〇月一三日	今城中将亭内会
天和三年一〇月一六日	新院月次
天和三年一〇月一六日	新院当座
天和三年一〇月二九日	聖廟法楽

〔古相正美「近世御会和歌年表」(『中村学園研究紀要』第二十七号 一九九五(三月))〕

『新院御会部類集』の二十九回はすべて掲載されていた。また、右のうち、天

和二年十月十六日の「新院当座」、同三年一月二十八日の「新院」、同年二月十二日の「新院当座」、同年五月十六日の「新院当座」、同年閏五月十一日の「新院当座」、同年六月十二日の「新院月次」の六回は、『新院御会部類集』に収載されていなかった。

後西院による和歌御会は、天和二年九月以降、ほぼ毎月、月次・当座ともに開催されており、『新院御会部類集』はその記録であることが確認できた。

第四節 収載和歌御会の位置づけ

『新院御会部類集』の収載和歌御会の位置を知るため、試みに、1「天和二年九月四日新院御当座」の和歌(全二十首)を、『新明題和歌集』(宝永七年刊)・『新後明題和歌集』(享保十五年刊)・『新題林和歌集』(享保元年刊)・『部類現葉和歌集』(享保二十年刊)と比較し、入集状況を整理する。³⁾

つぎに掲げるのは、『新院御会部類集』の1「天和二年九月四日新院御当座」の本文である。各和歌の上に付けた数字は、この御会での通し番号である。「」内に、『新明題和歌集』・『新後明題和歌集』・『新題林和歌集』・『部類現葉和歌集』の歌番号と異同を記す。

天和二年九月四日 新院御当座

初秋朝

1こゑたてつ朝けの風も秋あさき露の玉さ、一夜二よに

〔『新明題和歌集』1810作者「新院」初句「声たつる」三句「秋あさき」〕

野萩露

時量

2置露をあたるといひて払はずはすゑ野の萩の色をみましや

〔『新明題和歌集』2001〕

庭萩風

資茂

3 軒ちかくなとうへをきてた、ならぬ秋の声きくおきのうは風
〔『新明題和歌集』1983〕

夜鹿

4 妻恋の友としらすや小男鹿のこゑきく人もひとりぬるよを

〔『新後明題和歌集』691作者「後西院」二句「友としらてや」、

〔『部類現葉和歌集』4070二句「友としらてや」「天和二・九・四」

夕虫

通茂

5 我のみの秋とやかこつきりくすうきにはたれもたえぬ夕を

〔『新明題和歌集』2125〕

山月

隆慶

6 雲霧をはらひつくして山のはにかせを光の月のさやけさ

〔『部類現葉和歌集』4439作者「隆尚」結句「月のさやけさ」〔さ〕

〔同（天和）二・九・四〕

浦月

経尚

7 月影はなみの千里に住吉のうらの秋霧消ものこらて

〔『部類現葉和歌集』4575四句「浦の朝霧」「天和二・九・四」

聞持衣

実種

8 今のはやくもみにしむ里人のうつあささぬの声もよさむに

〔『部類現葉和歌集』4893四句「打麻衣」「天和二・九・四」

杜紅葉

行豊

9 またきより時雨はもりの下かけに染て色こき秋の紅葉々

〔『新明題和歌集』2603〕

暮秋霜

幸仁

10 くれて行秋のかたみの露もいま結びかへたる野へのはつ霜

寄雲恋

定淳

11 あはれわかかひなき名のみ立雲の身は中空に消も果なて

〔『部類現葉和歌集』7897「天和二・九・四」

寄雨恋

定経

12 かならずと契りをきしも徒にこぬよしられて降あめそうき

〔『部類現葉和歌集』7948「天和二・九・四」

寄木恋

宣勝

13 つれなさのおなしたくひにみるもうしかはらぬ軒の松のみさほを

〔『部類現葉和歌集』8206三句「みるもうき」「天和二・九・四」

寄草恋

時方

14 うらかる、秋も末野の葛かつらたへすや風のかへすうらみに

〔『新題林和歌集』7178初句「うら枯し」

寄糸恋

基照

15 我おもひみたる、いとすちくをしれかし人のうきふしとたに

〔『新明題和歌集』3885〕

暁鶏

幸仁

16 一方と聞し枕にかすそひてとりの八声に告るあかつき

〔『新明題和歌集』4188〕

簷松

光雄

17 いくたひか紅葉にもれて軒の松秋なき色をあきにみすらむ

窓竹
 『新明題和歌集』41題「軒松」
 員九

18 ふうらぬまも雨かとはかりくれ竹のよなく／＼かせの窓をうつ声
 『新明題和歌集』4154

山煙家
 基熙
 19 すむ人のありとはかりに朝夕の煙をたえぬ山辺をもとへ
 『新明題和歌集』4089

寄神祝
 保春

20 あふくそよすゑ久堅の天照す神のこゝろのくもりなき世を
 『新明題和歌集』4588

比較した結果、全二十首のうち十九首が入集していた。本文には、漢字の表記や仮名遣い、送り仮名に関する異同が認められた。「こゑたてつ」↓「声たつる」、「友としらすや」↓「友としらてや」、「みるもうし」↓「みるもうき」、「うらかるゝ」↓「うら枯し」など、比較の大きな差異もあった。

おわりに

以上、立命館大学図書館西園寺文庫蔵『新院御会部類集』を、多角的に考察してきた。その結果、『新院御会部類集』が、後西院が天和二年・天和三年に主催した和歌御会をほぼ網羅したものであることが判明した。

ここで、後西院歌壇について考える。

『新院御会部類集』収載和歌御会からわかる後西院歌壇の主要な構成員は、後水尾院歌壇を引き継いでいることがうかがわれた。すなわち、後水尾院歌壇の主要メンバー（道見法親王・飛鳥井雅章・日野弘資・烏丸資慶・中院通茂）のうちの中院通茂がおり、飛鳥井雅章の男飛鳥井雅豊、日野弘資の男日野資茂・外山宣勝、烏丸資慶の男烏丸光雄もいた。また、高野保春・穂波経尚・勸修寺経慶・平松時量も後水尾院近習の血脈である。後西院歌壇は、後水尾院の歌壇を継承したものだといえる。

一方で、同時代に併存した靈元院歌壇に関しては、前掲田中隆裕論考に、「靈元天皇下には古今伝授歌人の血脈者以外は、今出川伊季・柳原資廉・庭田重条・勘解由小路韶光といった父後水尾院サロン出身ではない別の連衆が集い、全く別箇にサロンが形成発展しつつあった。」と指摘されている。さらに、鈴木健一氏『近世堂上歌壇の研究 増訂版』（汲古書院 二〇〇九年）には、「靈元院歌壇は中院通茂・清水谷実業・武者小路実陰・烏丸光栄らがあり、後水尾院歌壇が整備した、文芸サロンとしての堂上歌壇の特質をさらに拡充したと言える。」とあり、その歌壇の独自性が強調されている。

後西院歌壇が独自に発展しなかったのは、後西院が中継ぎの天皇だったことや、和歌会に参加し始める年齢が十六歳と決して早くなかった（靈元院の場合は、十歳で和歌会に参加している）ことが理由ではないかと考える。くわえて、前掲の田中隆裕論考

は、

一体、靈元院は、在位の少年時代、女色と和歌に耽溺する傾向が強く、青年期、古今伝授後は人員精選の「御内会」という歌道修練御会を興行するなど歌壇活動を意欲的に行う和歌重視のサロンを自ら形成していたと考えられる。

後西院崩御の翌貞享三年五月に靈元院サロンで『内侍所法楽千首和歌』という大規模な御会活動が興行されているが、その連衆の中に元後西院サロンの者達は、基熙・時方・意光・通茂・実種・資茂・光雄らを見出すことができるが、それから十六年後の元禄十四年九月の二度めの千首興行『太神宮法楽千首和歌』には、行豊・雅豊・通茂・といった歌人の血脈者達しか見出せなくなっている。基熙や実種ら多くがいまだ健在であり、結局後西院崩御以後は新たなサロンに加わらなかつた保春もいたくらいである。

この元禄十四年の六月五日に、その宮内卿保春が関白基熙を訪れて閑談している。その内容は「子細難記。大概和歌・連歌衰微之時」（基熙公記）と歎き合ったものであった。後水尾院下、父院と同じ趣味に遊ぶ後西院サロンに侍した連衆にとって、靈元院サロンに異質なものを感じ、それを「和歌・連歌衰微」と彼らの眼に映じたものと考えられる。

と述べる。

西園寺文庫蔵『新院御会部類集』について

後水尾院と後西院は、和歌だけでなく、茶道・華道・香道などにも精通していた。諸芸を好み、風流を楽しんだ後水尾院・後西院と、その一方で、和歌だけを意欲的に行つた靈元院。この違いが、歌壇の状況にあらわれているのではないだろうか。

後西院は、和歌史の中であまり重要視されず、研究も進んでいるとはいえない。しかし、たくさんの和歌会を開催し、有力な歌人を輩出したことは、意味のあることであつたであろう。また、近世和歌の流れは、中世歌学を継承した細川幽斎の門流から始まつたとされ、幽斎に古今伝授を受けた智仁親王、智仁親王から受けた後水尾院が御所伝受の出発点と考えられている。その流れを途絶えさせることなく、後西院は後水尾院歌壇を引き継いだ。そのような意味でも、後西院の貢献度は大きいと考える。

その後西院歌壇の一端を反映したのが、『新院御会部類集』である。先述したように、同本は、西園寺実輔の蔵書と思われる。どのような状況で写され、なぜ後西院歌壇に属していなかつた西園寺実輔が所持したのか。解決できなかった課題は多いが、引き続き考えていきたい。

さいごに、このような貴重な資料が立命館大学図書館西園寺文庫に所蔵され、現存していることは誇らしく感じられた。今後の研究のさらなる発展を期待する。

注

(一) 西園寺公望の経歴については、松田敬之『華族爵位』請

願人名辞典』(吉川弘文館 二〇一五年)、および『国史大辞典』(吉川弘文館)を参照した。

(2) 引用本文は、妙法院研究会『妙法院史料第二卷 堯想法親王日記二』(吉川弘文館 一九七七年)による。

(3) 上野洋三編『近世和歌撰集資料集成』第二卷「堂上篇上」(明治書院 一九八七年)を用いた。

(なかじま・ゆいか 二〇一六年度本学卒業生)